

平成九年十月二十六日（日）

郷土研究会資料

第二四六回 史跡めぐり

護国寺より小石川寺町をあるく

越谷市郷土研究会

第二四六回 史跡めぐり

日時 平成九年十月二六日(日)

集合 南越谷駅前 午前九時

行先 護国寺より小石川寺町をあるく

コース 南越谷駅↓武蔵浦和駅(乗換)↓池袋駅(乗換)↓護国寺駅

護国寺↓林泉寺(しばらく地蔵)↓深光寺(滝沢馬琴一族の

墓・他)↓石川啄木終焉の地↓小石川植物園

(昼食)

念速寺(美幾女の墓)↓慈照寺(辰己屋惣兵衛の墓)↓処静

院の石柱↓伝通院(お大の方墓・他)

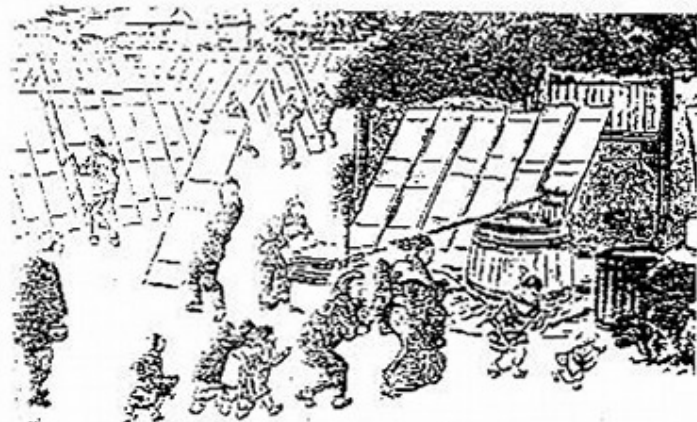
後楽園駅↓池袋駅(乗換)↓武蔵浦和駅(乗換)南越谷駅

案内者 理事 山田 政信

参加費 金二〇〇〇円

(含交通費・資料・入園料・保険料他)

主催 越谷市郷土研究会



音羽の抄紙場(明治30年ごろ)

【護国寺】

新義真言宗豊山派別格本山で神崩山悉地院と号し、大和長谷寺末。

開山は亮賢僧正。天和元年（一六八一）五代将軍綱吉が生母・桂昌院の請に
応じて、もとの高田御薬園の地に建てた寺である。桂昌院の念持仏であった
天然琥珀観音像を本尊とし、幕府の財力と元禄文化の粋を集めた本堂や仁王
門、惣門、東京で唯一の桃山期の建築物である月光殿などを擁し、江戸の真
言宗寺院のうちで最大の規模を誇る。

寺領三百石、のちに千二百石の寄進をうけ、以来将軍家の信仰をうけ、将軍
参詣のときの御成り道であった音羽通りをその門前町屋とする大寺院となっ
た。

〔本堂〕 大正十五年に天和草創当時の本堂を失ったが、元禄十年に建立された観音堂を移して本堂とする。
桁行七間・梁間七間、単層、入母屋造り銅板本葺きの構造である。和様・唐様の折衷様式を基調とする寺流造
築様式の旧規を示している。

〔月光殿〕 ちと滋賀県大津市三井寺塔頭の空殿で、慶長三間（一五九六—一六一四）に一部葺き直されたこと
から「慶長館」ともいわれていたものであるが、昭和三三原氏の寄進によって、現在地に移建された。護国寺の
歴史とは直接かかわりはないが、桃山時代の書院建築様式を伝えるものとして貴重である。
他に「大師堂」「薬師堂」などがある。

江戸時代の城下町は「御城」を中心として放射状に周辺にのびる道すじの「一丁」の数は方には三三城近くから
一丁目、二丁目と遠くなるほど数字は大きくなるのが普通である。この音羽通りは、山門寄りから一丁目が始
まり、江戸川橋寄りが九丁目となっていた。護国寺が徳川家の祈願寺のためか、納言三母桂昌院の権勢による
ためか、その由来はさだかでない。



護国寺本堂

〔音羽講中・庚申塔〕 兼兼師堂の傍に区指定文化財の庚申塔があるが、形状は精巧に造られており、かつ須弥壇（仏像をのせる台）型となっている。

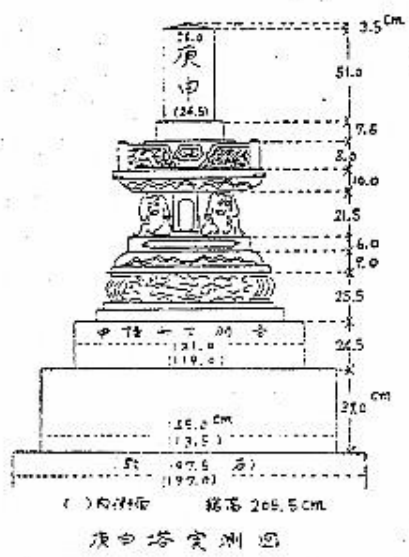
天明五年（一七八五）の銘があり、造立者は門前の音羽通りの人々で、七十六人の名が刻まれている。
 庚申塔でも、全国に例をみない形式である。

〔桂昌院〕

桂昌院についてはいろいろ異説がある。寛永元年（一六二四）京都に生まる。京都堀河の八百屋の娘で、名はお玉（一説に光子、後に吉子と改める）といわれる。父親が亡くなって、母は二条家の公郷侍の本庄の後妻になった。のちお玉は將軍家光の側室のお万の方に仕えた。美貌と利発なお玉に眼をつけたのが、家光の乳母春日局であった。お玉は家光の側室となった。

お玉は、上野国碓井郡の亮賢という僧の祈祷をうける。この予言が的中し、家光の第四子徳松（後の綱吉）を出生する。徳松は館林候（二十五万石）となり、別邸として白山御殿（現・小石川植物園）を与えられた。家光の死後出家して、桂昌院と号し、大奥ばかりでなく、江戸城内でも絶大な権勢をもち、政治的にも影響を及ぼしたといわれる。

仏教の信仰厚く、綱吉の「生類憐れみの令」は、彼女の勤めによるところが大きいという。
 権力欲旺盛だった桂昌院は、綱吉に世継ぎが望めそうにないと判断すると、將軍正夫人にしか許されない「一位」の位を狙い、京の公郷たちに働きかける。元禄十四年（一七〇一）、その京から訪れた勅使の饗応に画策する桂昌院。そのときの接待役は、あの浅野内匠守長矩―「松の廊下」への序幕であった。



寺の入口の石段上に五十数基の石仏が並んで、道行く人をながめている。この寺は、慶長七年（一六〇二）伊藤半兵衛を開基とし、通山宗徹を開山として開創されたと伝えられる古刹の一つである。

ここには俗称「縛られ地蔵尊」といわれる地蔵菩薩がある。祈願の時に縛り、成就の時にほどくというものです。

この地蔵尊は舟型光背を背にした約一米位の地蔵尊で、裏面をみると男女の法名がある。

【深光寺】

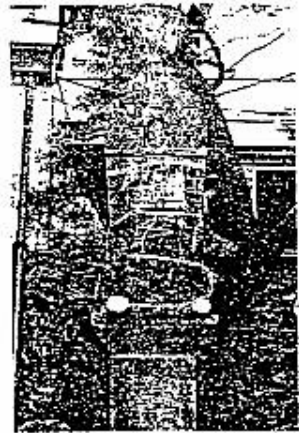
寛永一六年（一六三九）に開創。この寺には、滝沢馬琴一族の墓がある。馬琴は江戸末期の戯作者で、由緒馬琴とも称した。「南総里見八犬伝」「椿説弓張月」などは代表作である。

馬琴夫妻の墓 著作堂隠菅蓑笠居士 嘉永元戊申年一冬十一月六日

黙普静舟到岸大師 天保十二辛年一春二月七日

境内の奥の一族の墓に馬琴の長男宗伯（医者の見習い）の妻女みち女の墓があり、法名「操普願筋路霜大師」安政五年八月十七日と刻まれている。

馬琴は大作「南総里見八犬伝」の完成を目前にして完全に失明した。みちは、馬琴の口述筆記をして舅との二人三脚で完成させた。文字を知らないみち女の非常な努力によるもので、一点一画誤りなく筆記できるまでに



縛られ地蔵（林泉寺）

なり、天保十二年遂に「八犬伝」を完成させたのである。馬琴七十五才、みち女三六才になっていたという。彼女をして、そうまでさせたのはいったい何であったのだろうか。みち女は町医者の娘で、文字は草双紙の拾い読みか、平仮名はまずい字で、平均的な町女房であった。

馬琴は、文化十一年（一八一四）に「八犬伝」の執筆にかかった。天保五年（一八三四）右眼失明、翌六年執筆の手伝いをしていた長男が病死、天保十一年両眼を失明した。馬琴はみち女に文字を教えながら口述筆記にかかった。覚える側も大変、偏も旁もわからない。手で形を空に書いて教える。遅々として進まない。しかし完成しなければ小説として成立しない。又完成しなければ一家が路頭に迷う。こうした環境のなか徐々にみち女は筆記の腕をあげていく。

滝沢家の台所を預かるみち女としては、原稿料の収入を得たいという経済的な欲求も強かったと思われるが、口述筆記をし、両眼失明という状態にあっても馬琴の文学への執念に打たれたのではなからうか。舅と嫁の一体となって、一つの目的に向かった姿であろう。

切支丹灯笼

本章横にある。三二部は「聖像」を陽刻し、上部のふくらみ部分に梵字まがいの記号様の図柄を陰刻してある。

〔石川啄木終焉の地〕

石川啄木は北海道各地を放浪し、明治四十一年再度上京する、この時は堀三の先賢金田一京助の世話になる。つづいて蘆平館・そして喜之床には明治四十二年に移り家族を迎える。この頃は朝日新聞の校正係を勤めながら生活する。併し、生活苦と彼自身の病苦はつねにつきまとっていた。こうした状態の中、明治四四年暮乃床からここ終焉の地となる久堅町の宇津木家の借家に移り住む。

そして明治四五年四月十三日に家族と友人の若山牧水にみとられながら二十七才でこの世を去る。

牧水の歌に、

四月十三日午前九時石川啄木君死す

午前九時やや暗れそむるはつ夏のくもれる朝に涙を誤りてけり
病みそめて今年も春はさくら咲き　ながめつつ君の死にゆきにけり

(文京区史跡散歩ヨリ)

小石川植物園 (小石川養生所跡)

この植物園は、もともとは「承応元年八月、寛文二年三月、同六年十一月と、三度に亘り家綱公より上州館林公へ小石川の屋敷を賜りたり。」とあり、後に三代將軍となる綱吉が松平徳松といていた時代の下屋敷であった。綱吉、將軍職就任とともに、この屋敷跡は「御薬園」(御薬園)となる。

後に八代將軍吉宗の時代の享保七年に、町医師・小川笠船の意見によって、貧民救済のための「養生所」を園内に開設する。その時の養生所専用井戸跡が現存している。

施薬院(養生所)に関する「触」によると

「小石川伝通院前に罷在候小川笠船と申すもの、極貧の病人の爲施薬院可被仰付哉の旨目論見書付存寄申上候に付、段々御吟味の上今度小石川於御薬園病人養生所被仰付候間、町極貧の病人薬も給兼候体のもの或は独身にて看病人も無之又は妻子女之候得共不殘相煩妻三不罷成もの類、此養生所へ罷越逗留候へ、寛治請可三候」とあって、開設趣旨と対象が明確になっている。

この「養生所」は、明治になると鎮台府に所属して「貧病院」となるがすぐ廃止される。そしてまもなく東京府に所属し、明治二年大学東校、同四年には文部省、そして同十年には、東大付属の植物実験場となり今日に至る。

なお、ここでは、青木長陽別称「甘藷先生」によって「救荒食物」として甘藷(薩摩芋)の品種改良栽培が行われていた。その記念碑がある。

建設の歴史散歩

建設文化研究所・主宰 菊岡俱也

旧東京医学校本館

小石川植物園内に保存

本郷に仕事部屋を置いていたので、東京大学キャンパスにはしばしば出かける。学生食堂でランチを食べて生協で文房具を買って書籍部で専門書を漁って三田池ではんやりしていると半日はかりはまたたく間、赤門が正門から入って医学部の龍岡門に抜けるのがコースだが、今回はその医学部の前身にあたる建物をめぐる散歩である。

ただしこの近代医学史上の歴史的建造物は、いま



旧東京医学校本館

は本郷キャンパス内にはなく、小石川植物園内に移されているから、地下鉄三田線白山駅のほうにさらに足を延ばさなくてはならない。

わが国の官立高等教育機関（現東京大学のはるか源流といってもよいが）は、昌平黉、開成所、医学所という三つの江戸幕府直轄の学問所の系統をひいている。政権は代わっても最高学府だけはそのままに受け継ぎ、明治元年には昌平学校、開成学校、医学校と改めた。翌二年にはこの順で太学校、太学南校、太学東校（校舎は神田和泉町の旧藤堂藩邸にあった）と名称に「大学」を加えて改める。このうち大学校は文部省となり、大学東校が七年五月に東京医学校となる。南校は再び開成学校に戻り東京開成学校と改称後、この東京医学校と合併して明治十年四月に、学制による最初の大学である東京大学（帝国大学の前身の）となる。ちなみに東京大学という校名は明治十年代にも存在したのである。

東大といえば、文京区の本郷だが、いちばん早く

現在の本郷キャンパスに移ってきたのは和泉町にあった医学部の前身である医学校。その校舎は本郷元富士町の旧加賀前田藩邸のあとに明治八年七月に着工、九年十一月二十日に竣工している。

石井昭氏によれば、明治九年三月以降の学校工事は文部省所管だが、以前の工費千円以上の施設工事は工部省所管であった（『日本建築学会論文集』六十号）から、医学校の建築は工部省所管であっただろう。「明治工業史 建築編」には「林忠恕式の建築なり」と記されている。林は大学南校の設計者として知られたお役人建築家である。

明治九年竣工という近代の高等教育機関の校舎建築としては早く、保存されているものでは旧札幌農学校演武場（現・時計台）とこの本館だけだろう。近代医学教育の舞台となったこの建物は明治四十四年に同じキャンパスの赤門近くに移築され、手は加えられたらしいが、昭和四十四年に東京大学理学部付属の小石川植物園に移された。

この植物園は絶対におすすめめの散歩場所である。よく言われる表現だが、「ここが東京か」と思う静寂な環境で、歴史好きのかたならば小石川養生所跡の雰囲気も、文学好きのかたならば寺田寅彦の佳品の味を、映画好きのかたならば近年の坂東三郎の「外科室」のロケシーンを思い浮かべられる場所でもあろう。奥まった池の向こうに本郷から移された旧東京医学校の本館が、まさに余生を送るにふさわしい面構えで鎮座している。

【念遠寺】

・三六六六六六

美幾女の墓がある。美幾女は（推定一八三五〜六九）、日本における「特志解剖」第一号である。自己の死後、死体解剖に応じて近代医学に貢献した。

このことに対して、当時の役所は一臆した後ハ厚ク相吊イ可遺事」として盛大な葬儀を行い、寺には「永代読経料金三両」を出し、退族には金十両を与えて希望通り念遠寺に埋葬した。人体解剖が道徳的に否定されていた世情の中でのことだけに、関係者は心をくだいたという。親兄弟遺族の名は伏せられたままであるという。

正面に「美幾女之墓」、右側面に「秋妙倅信女」左側面に「明治二年（八月十二日）」とある。裏面には

（要旨） 駒込追分町（現向丘二丁目）の荷物運搬人の美幾という娘が、梅毒にかかってなおらず病院で治療を受けたが病氣は重くなり、死後、解剖して医学の役にたちたいと願って死んだ。年は三十四才。解剖し調べることができてたいへん役立った。これが我が国の病死体解剖の第一号である。官はその志に感謝し小石川念遠寺に葬る。 医学校教官 とある。 医学校とは東京大学医学部の前身である。

【慈照院】

女装の踊り姿が陽刻されている辰巳屋惣兵衛（一七三三〜一八二二）の墓がある。

「快遊仙信士 文政四年十月二十四日」と刻まれている。本名を平井辰五郎といった。伝通院門前の表街角で田楽菜飯の店を出していた。福聚院の大黒天のはやり出したところで、店も繁盛した。

惣兵衛は若いころから神楽よりのまねをして道化踊を踊ることで人気を集め、天明八年（一七八八）には「狂言神楽」を工夫して、仮面をつけた踊りを創案した。



そして山王権現社や神田明神ほか各社の祭礼で踊った。女のかつらをかぶり小原女となり、巫女のまねをして踊った。諸大名の屋敷の鎮守の祭りにたのまれて行って、金銀を賜っても受けなかったといわれる。江戸ッ子のお祭り好きは有名だが、惣兵衛も、お祭狂いの代表者の一人である。

墓の前に大田蜀山人筆の狂歌碑もある。

おまつりと神楽の堂に辰巳屋が

かれ木娘や花さかせ爺

【処静院跡の石柱】

伝通院の門の左側に処静院の山門前にあった「不許軍酒入門内」の石柱がある。処静院は大黒天で有名な福聚院の北側にあつて、伝通院の塔頭の一つであつたが、廃寺になつた。

のちに新撰組となる浪士隊は、文久三年（一八六三）二月、幕府の徵募により、この地にあつた処静院で結成された。この付近にあつたといわれる試衛館道場（所在地は各説あり、小石川小日向柳町・牛込柳町の二説あるが、伝通院近くの今の善光寺坂の東側近くという説もある）の近藤勇・土方歳三・沖田総司などが平隊員として参加し、総勢二五〇名は、同月中山道を京都に上つて行つた。

【伝通院】

無量山寿経寺。慶長七年（一六〇二）家康の生母、お大の方が亡くなられたため、ここを菩提寺と定め、そ

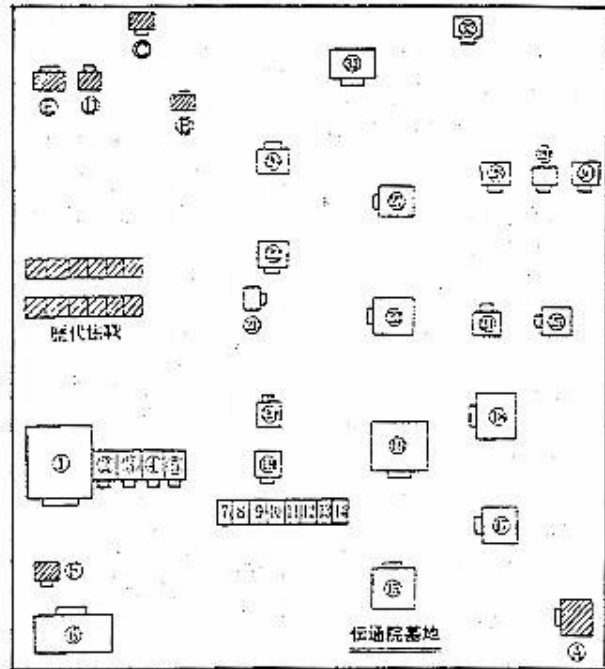
の法名「伝通院殿」より名付けられる。
開山は了誉上人である。

浄土宗関東一八檀林の一つであった。

江戸時代は徳川家ゆかりの人の墓だけで、特に婦人たちの墓が多い。

主な墓碑としては、ほぼ中央に伝通院之墓・千姫・孝子（家光御台所）の墓などがある。

その他には開山の墓、七郷落ちの一人として長州藩にのがれ、維新後は外務卿などを歴任した沢宣嘉の墓などがある。



- ① 於大の方（伝通院殿）
- ② 十一代將軍家斉の十五女文姫
- ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ 家斉の側室
- ⑯ 十二代將軍家慶の側室
- ⑰ 八代將軍家徳の側室
- ⑱ 六代將軍家宣の長男（三か月で没）
- ⑲ 家康の孫千姫（豊臣秀頼室）
- ⑳ 綱吉の兄、（家宣の父）綱重の正室
- ㉑ 三代將軍家光の正室孝子
- ㉒ 綱吉の兄危松（三歳で没）
- ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ 家斉の子
- ㊿ 古宗の子

引用・参考 文献

歴史と文化の散歩道

文京区史跡散歩

文京の歴史散歩

文京の文化史

建設の歴史散歩

東京都政策報道室 発行

（株）学生社 発行

文京区教育委員会社会教育課

同 右

建設業界

東都小石川絵図

(嘉永7年/500×538)





特別養護老人ホーム大塚みどりの郷
大塚公園
大塚先儒墓所
大塚五丁目
吹上稲荷
善心寺
大塚四丁目
みどりの図書室
東邦音楽短大
東邦中・高校
日通東京病院
大塚仲町公園
大塚三丁目
お茶の水女子大学
附属中学校
お茶の水女子大学附属高校
お茶の水女子大学
附属小学校大塚出張所
お茶の水女子大学
第七中学校
教育センター
大塚一丁目
筑波大学附属中・高校
小日向三丁目
音羽一丁目
橋山会館
小日向台町小学校
小日向台町幼稚園
新渡戸福造旧居跡
久世山
第五中学校
第一中学校
中・高校・短大
新大塚公園
貞静学園中・高校
林泉寺(しばられ地蔵)
拓殖大学・短大
こひなた保育園
小日向一丁目
小日向二丁目
水道二丁目
水道三丁目
西江戸川橋
小桜橋
中ノ橋
千石二丁目
大塚小学校
大塚幼稚園
大塚第一小学校
大塚第二小学校
大塚第三小学校
大塚第四小学校
大塚第五小学校
大塚第六小学校
大塚第七小学校
大塚第八小学校
大塚第九小学校
大塚第十小学校
大塚第十一小学校
大塚第十二小学校
大塚第十三小学校
大塚第十四小学校
大塚第十五小学校
大塚第十六小学校
大塚第十七小学校
大塚第十八小学校
大塚第十九小学校
大塚第二十小学校
大塚第二十一小学校
大塚第二十二小学校
大塚第二十三小学校
大塚第二十四小学校
大塚第二十五小学校
大塚第二十六小学校
大塚第二十七小学校
大塚第二十八小学校
大塚第二十九小学校
大塚第三十小学校
大塚第三十一小学校
大塚第三十二小学校
大塚第三十三小学校
大塚第三十四小学校
大塚第三十五小学校
大塚第三十六小学校
大塚第三十七小学校
大塚第三十八小学校
大塚第三十九小学校
大塚第四十小学校
大塚第四十一小学校
大塚第四十二小学校
大塚第四十三小学校
大塚第四十四小学校
大塚第四十五小学校
大塚第四十六小学校
大塚第四十七小学校
大塚第四十八小学校
大塚第四十九小学校
大塚第五十小学校
大塚第五十一小学校
大塚第五十二小学校
大塚第五十三小学校
大塚第五十四小学校
大塚第五十五小学校
大塚第五十六小学校
大塚第五十七小学校
大塚第五十八小学校
大塚第五十九小学校
大塚第六十小学校
大塚第六十一小学校
大塚第六十二小学校
大塚第六十三小学校
大塚第六十四小学校
大塚第六十五小学校
大塚第六十六小学校
大塚第六十七小学校
大塚第六十八小学校
大塚第六十九小学校
大塚第七十小学校
大塚第七十一小学校
大塚第七十二小学校
大塚第七十三小学校
大塚第七十四小学校
大塚第七十五小学校
大塚第七十六小学校
大塚第七十七小学校
大塚第七十八小学校
大塚第七十九小学校
大塚第八十小学校
大塚第八十一小学校
大塚第八十二小学校
大塚第八十三小学校
大塚第八十四小学校
大塚第八十五小学校
大塚第八十六小学校
大塚第八十七小学校
大塚第八十八小学校
大塚第八十九小学校
大塚第九十小学校
大塚第九十一小学校
大塚第九十二小学校
大塚第九十三小学校
大塚第九十四小学校
大塚第九十五小学校
大塚第九十六小学校
大塚第九十七小学校
大塚第九十八小学校
大塚第九十九小学校
大塚第一百小学校



善光寺坂の ムクノキ

小右川の善光寺坂を登ると大きなムクノキがある。澤田町稻河の御神木として200年以上も生きてきた。大きく枝を伸ばし、道の真ん中に誇ん張っている。木の周りは忙しい。車が何台も通り過ぎ、路地裏では製本所のフォークリフトが所狭しと動き回っている。一本の木が自然の大切さ、力強さを訴えている。

△文京区▽